

この人なくして、茨城は語れない

わたしも、あなたも、マ・チ・コ

この人なくして、茨城の教育は語れない

NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所・理事長

小野村 哲さん



撮影：及川 隆史

理科の実験から田植えまで、プロのダンサーをお呼びしてダンスの授業をしたり、管理栄養士さんを特別講師として招いて料理教室を行ったり…。

たとえば、「学校は大型バス、ライズはタクシー」みたいなもの。子どもたち一人ひとりを大切に、と「言うは安し」でしようが、現在の画的な環境に馴染めない子どものために、真正面から挑む姿は、実際に果敢で頼もしくあります。

子どもの頃、野球が大好きで、暇さえあれば、自宅の都営住宅の薄い壁に向かって100球200球とボールを投げていたという小野村さんは、さぞうるさかつたでしょうに、小野村さんはひと言も小言を言われたことはなかつたそうです。

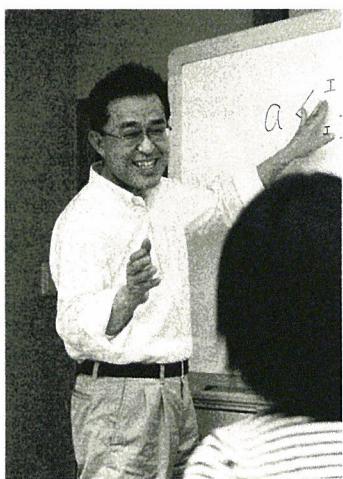
「野球好きねつて言われたことはありました。地域全体が温かく子どもを見守つてくれていたんですね」。

教育や学校だけでは、子どもたちの将来は明るくはなりません。シャツを下ろした商店街の店先を横目に登下校する子どもたちは、敏感にそれを感じているはずだと小野村さんは言います。

「いくら学校を変えて、地域がいきいきしていなければ子どもたちはその町に残りたいとは思いませんからね」。

子どもの器は、地域の器で決まるのかもしれません。学校という空間

を離れ、より大きな視野と深い懐で子どもを包み込む…教育者としての小野村さんの魅力と頼もしさはそのあたりにあります。



NPO法人 リヴォルヴ学校教育研究所
(つくば市二の宮・029-856-8143)
<http://www.rise.gr.jp>

教育に通じた方のエピソードには、光を感じます。小野村さんと幼少時代のお嬢様との逸話をご紹介します。

「教員を辞めた年は時間がたくさんあって、朝よく手をつけないで保育園まで一緒にきました。途中で大きい水たまりがあり、娘が『水たまり！』と言いつながら、長靴ではちゃちゃと入つていったんです。真ん中に立つて振り向いて、『パパ、ガリバーハー』って言つんです。そのときの

ものすごく可愛い顔は、今でも忘れません」。

前の晩に読んでもらつたガリバーの絵本を思い浮かべながら、にこにこするお嬢様の姿には、こちらも心を洗われるようです。

小野村さんは学校に上手く適応できない子どもたちに、新たな学びの場を提供しようという「ライズ学園」を運営しています。総合的に子どもたちの育ちの場、学びの環境を